

再びその人らしい生活に

# ふれあい ひろば

2024年 春号 Vol.108



愛仁会リハビリテーション病院

三島圏域地域リハビリテーション  
地域支援センター



- 住所：高槻市白梅町5番7号
- 電話：072-683-1212
- URL：<http://ajinkai.or.jp>

- 1面 地域におけるリハビリテーションの推進
- 2面 就任のご挨拶 / 【連載】セラピストだより⑧
- 3面 新たに就任された医師のご紹介
- 4面 患者さまだより④ / 連載 高槻在宅サービスセンターだより



## 地域における リハビリテーションの推進

愛仁会リハビリテーション病院 院長

越智 文雄

皆様、日頃より愛仁会リハビリテーション病院にご支援を賜り誠にありがとうございます。当院は回復期リハビリテーション病棟を中心とした入院診療に加え、各種専門外来においてリハビリ診療、治療を行っています。専門外来としては脊髄損傷外来、装具外来、痙縮治療外来、外来心臓リハビリテーションなどを行っています。これらの外来は当院を退院された患者さまだけでなく、かかりつけ医からの紹介も受け入れています。

一昨年開始した摂食嚥下外来では、在宅や施設において嚥下機能が気になる方の嚥下機能評価やアドバイスを行っています。徐々に医療機関や施設からの紹介も増えてきました。

脳卒中の患者さまは、麻痺のみではなく注意障害などの高次脳機能障害もみられることから、自動車運転を再開できるかどうかの判断に迷うことが多いかと思えます。当院では今年度から大阪府の高次脳機能障がい者の自動車運転評価モデル事業に参加する形で、運転外来をはじめました。今後は自動車教習所と連携し、実車判定も行いながら、運転の可否について助言していきたいと思えます。

また昨年度、NASVA「重度脊髄損傷者受入環境整備事業」の受託施設に、西日本では2か所の病院の一つとして選ばれました。今後は交通事故により重度脊髄損傷となった患者さまの入院を受け入れてまいります。

更に大阪府が行う高次脳機能障害に関する地域別実践研修の三島圏域における事務局を担うことになりました。既に指定されている三島圏域地域リハビリテーション地域支援センターとしての活動ともども、地域におけるリハビリテーションの中核として貢献していきたいと思えます。

加えて昨年、主に脳卒中の患者さまを対象に、公的保険外のリハビリテーションを行う「アールリハピステーション」を開始しました。医療保険や介護保険ではリハビリの期間や時間数が限定されているため、それらのリハビリでは満足できない方のニーズに応えていきたいと思えます。

引き続き患者さまや地域の医療機関のニーズに応えながら、当院における専門診療を行っていきたく思いますので、今年度もよろしくお願ひします。



# 就任のご紹介



副院長 磯山 浩孝

当時としては珍しく、医師になってすぐにリハビリテーション科を専攻し、臨床・学術に研鑽してきました。

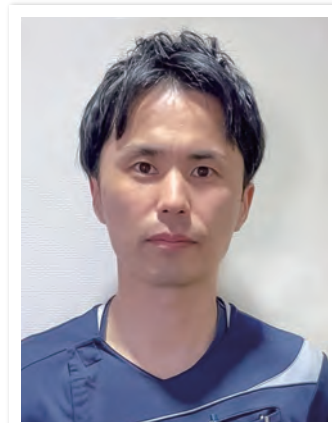
リハビリテーションは手足の運動のイメージが強いかもしれませんが、高次脳機能障害・嚥下障害・呼吸障害・心機能低下など、多岐にわた

って必要とされています。

当院ではこれらの多くに対応しておりますが、この度副院長に就任し、長年のリハビリテーション科医としての経験を生かし、更に良質な医療を提供できるよう努めたいと考えております。

また、日本リハビリテーション医学会近畿地方会幹事として、リハビリテーションの輪が広がるよう活動しております。

今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。



リハ技術部 副部長  
山木 健司

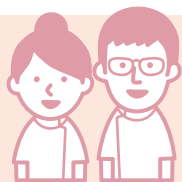
地域の皆さま、初めまして。

2024年4月より、愛仁会リハビリテーション病院 リハ技術部 副部長に着任いたしました理学療法士の山木健司と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

当院には、理学療法士104名、作業療法士81

名、言語聴覚士33名が在籍しており、関西でも有数のリハビリテーション専門病院です。入院患者様・外来患者様・在宅の利用者様に対して、「再びその人らしい生活に」を合言葉に、質の高いリハビリテーション医療を提供できるよう、セラピスト一同力を合わせて参ります。

「装具外来」「痙縮治療外来」「脊髄損傷外来」「外来心臓リハビリテーション」等も行っておりますので、在宅生活においても何かお困りのことがございましたら、お気軽にお問合せください。



## 「とろみ」について

言語療法科 西島 浩二

水分や食事にとろみを付けることができる「とろみ剤」ですが、最近はドラッグストアなどでも多くのメーカーのものを見かけるようになりました。メーカーによって少しとろみの付き方や付くまでの時間が違ったりしますので、いろいろ試してみたりお店の方に相談してもらったらよいかと思います。

脳卒中後の障害や加齢によって嚥下（飲み込み）の反射が遅くなったり、力が弱くなったりすることがあります。その際に水分や食事にとろみを付けることで、通常より喉を通過する速度を遅くしたり、まとまりをよくしたりする効果があり、飲食物が誤って気管に入ってしまうことを防ぐことにもつながります。

とろみの濃度は、日本摂食嚥下リハビリテーション学会にて「薄いとろみ」「中間のとろみ」「濃いとろみ」の3段階に分類されています。とろみの濃度は濃ければ安全かというそうではなく、その方の嚥下機能に合わせた濃度に設定することが大切です。濃すぎると逆に飲みにくくなったり、美味しく感じなくなったりしてしまうことがあるので注意が必要です。

最近では、炭酸飲料本来のシュワシュワ感を残したままとろみを付けることができるとろみ剤も販売されていたりして、嚥下障害があっても摂取することができる種類の幅は広がってきています。

とろみ剤を上手く活用して、美味しく安全に水分や食事を摂取していきたいですね。



## とろみ剤の使い方

飲み物にとろみ剤を加えながら混ぜる。泡だて器を使うと混ぜやすい。

- 時間がたってから混ぜるとダマになりやすいので注意！
- 色々なとろみ剤があり、商品によってとろみの付き方が異なります。

とろみのつけすぎに注意しましょう！

### 薄いとろみ



スプーンを傾けると、すっと流れ落ちる。

### 中間のとろみ



スプーンを傾けると、とろとろ流れ落ちる。

### 濃いとろみ



スプーンを傾けても、形状がある程度保たれ流れにくい。

せうじつたより  
VOL.18



# 新たに就任された医師のご紹介



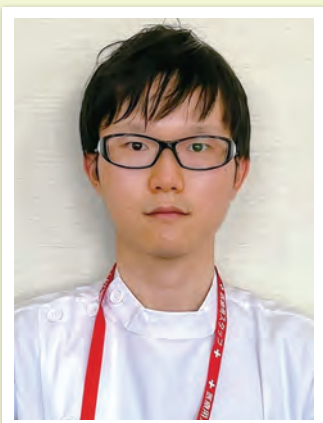
診療部 部長 松田 茂

令和6年4月に愛仁会リハビリテーション病院に着任いたしました。  
私は平成24年に高槻病院整形外科、その後同一法人である千船病院整形外科にて勤務し再び高槻で勤務することになりました。以前とくらべて街や病院周囲の雰囲気も大分変わっており感慨深く感じております。これまで大腿骨近位部骨折などの整形外科の一般外傷と関節リウマチの患者様を永らく担当しておりました。  
回復期リハビリテーションでの診療においては、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、看護師、MSW、薬剤科、栄養管理科、検査科、放射線科、事務部の方々といった多くの職種のかたが患者様の機能回復に注力されており、これまでの経験を活かしその一助になることができればと思います。



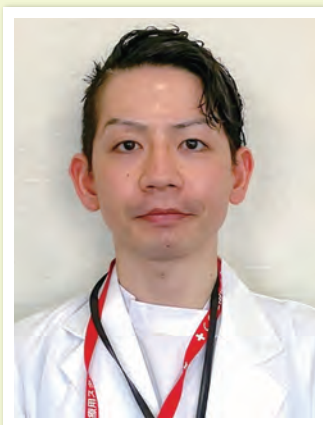
診療部 医長 吉澤 賢志

はじめまして。リハビリテーション科医師の吉澤です。  
リハビリテーションというと理学療法士、作業療法士、言語聴覚士といった療法士のイメージが強いと思います。リハビリテーション科医師の役割は、療法士、看護師、ソーシャルワーカー、栄養士等々の医療従事者および患者さん、患者さん家族を含めたチームをまとめる事です。患者さんが、より良い人生・生活をおくれるようになるために必要なリハビリテーションをしっかりとできるように、全身管理とチーム医療を行っていきたく思います。  
病気や怪我が完全に治らなくても人生を諦めない、よりよい人生をすごせるように全力でサポートします。



診療部 医員 奥田 草太

初期研修から専門医取得にかけてこれまでは京都で勤務しておりましたが、出身地での回復期リハビリテーション治療に携わりたいと思い、この度入職いたしました。  
働く地域や環境が変わり、色々和不慣れな点があるかと思いますが、患者様お一人お一人がその方らしい生活を送ることができるよう、これまで学んだことを活用して、チームの一員として精一杯頑張りますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



診療部 専攻医 津田 堯之

リハビリテーション科医師の津田<sup>たかゆき</sup>堯之と申します。  
医師として5年目であり、他の先生と比較すると経験は浅いですが、患者様の健康と回復をサポートすることに対する情熱では負けません。  
患者様と密にコミュニケーションを取ることで、一人ひとりのニーズや目標に焦点を当てたりリハビリテーション治療を提供できるよう心がけております。  
身体的なリハビリテーションだけでなく、日常生活をより充実させるお手伝いをさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。





# INTERVIEW

インタビュー



「さんは脳梗塞の診断を受け、愛仁会リハビリテーション病院へリハビリ入院されました。入院当初は車椅子でしたが、退院時には長距離歩行ができるようになりました。現在は当院の通院リハビリを利用されています。

入院中の過ごし方や退院後の生活についてインタビューさせていただきました。

## Q. 入院中はどのように過ごされましたか？

一番大変だったのは嚥下のリハビリでした。入院時は経鼻栄養（鼻からの管による流動食）でしたが、日々諦めずにリハビリを継続し、なんとか口から食事ができるようになり、徐々に体力も戻ってきました。リハビリ以外の時間も、歩行練習やバランス感覚向上のためのトレーニングを行っていました。トレーニング内容は、日々のリハビリの課題に対して「どうしたら向上するのか」と自身で考え、試行錯誤しながら取り組んでいました。

## Q. 現在の生活を教えてください

毎日3km～4km程歩くようにしています。自宅ではなかなか筋力トレーニングができないので、通院リハビリに通うことによりトレーニングを行い、生活の課題点を相談しています。

ゆくゆくは趣味のフットサルができるようになりたいです。そのためにもっと身体を動かせるようになる必要があると思っています。

懸命なリハビリの甲斐もあり、当初の予定より早期に退院され、息子様の卒業式に出席することができました。この度はお時間を頂きましてありがとうございました。次の目標が達成できることを心より応援しています。



## 愛仁会高槻 在宅サービスセンターだより

### デイサービスでのリハビリに奮闘中です

高槻在宅サービスセンター ケアプランセンター ケーアイ 稗田尚美

Aさんは脳梗塞で昨年5月に高槻病院へ入院し、その後、愛仁会リハビリテーション病院でリハビリを受け、9月に退院されました。

後遺症としては右の上肢と下肢に麻痺が残りましたが、退院後すぐに当院の訪問リハビリを利用することで、生活上の基本の動きと屋外での杖歩行の安定を図りました。自宅の環境においては、ベッドサイド・玄関扉から扉までの間にレンタル手すりを設置し、トイレ内の手すりは住宅改修を行いました。入院前は運動習慣がなかったAさんですが、週1回の訪問リハビリの他に、奥様の協力も得ながら自主練習にも毎日取り組まれています。今では1階寝室から2階リビングへの階段昇降を一人でこなしています。屋外では杖歩行で300m程度を奥様の付き添いで散歩ができるまでになりました。

への諦めやもどかしさを感じていました。「右手を使う機会をもっと持つてほしい」という奥様の思いもあつたことから、Aさんの現状をデイサービスのスタッフとも共有し、今年の2月から右手の動きに焦点を当てたりリハビリに取り組み、現在も地道に努力されています。更には、今春からデイサービスを週2回に増やし、頑張っておられます。今後は、奥様との散歩の機会と距離を増やすことや、右手を使つて細かいことができるようになることを目指しています。

11月末に訪問リハビリが終了になってからは、週1回リハビリに特化した半日デイサービスの利用を開始し、筋力や体力を維持しています。しかし、もともと細かい作業を丁寧かつ正確に行うことを得意とされていたAさんは、利き手である右手が思うように動かないこと

